

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 公益社団法人 国際日本語普及協会

1. 事業の趣旨・目的

2010年度より受け入れを始めたタイのメーラキャンプから来日した、第三国定住難民第一陣5家族(28名)のうち3家族(15名)が、RHQ支援センターでの初期集中研修を終えた後、鈴鹿市に定住した。キャンプとは生活・文化・習慣が大きく異なる中、彼らが日本での新しい生活と仕事に慣れることは容易ではない。スムーズな適応のためには日本語の継続学習が不可欠であるが、定住後、彼らにとっては新しい地での仕事と生活に慣れることが第一課題であり、一方、地域の日本語教室は遠くて通うことが困難であるなどの理由で、彼らが自力で日本語学習を継続することは困難な状況であった。日本語力不足は、地域社会参加へのハードルも高くする。

そこで、第三国定住難民が来日前と来日後、どのような日本語教育を受けていたのか、第三国定住難民の背景や言語習得上の困難、日本語指導上、留意する点などについて、鈴鹿市の学習支援者に向け実践的研修を実施した。講師は難民への日本語教育に豊富な実績と知見を有し、来日前及び来日後研修を担当した公益社団法人国際日本語普及協会の講師が担当し、研修の目的として以下の3点に焦点をあてて実施した。

- ①第三国定住難民の背景、日本語習得上の困難点、指導上、配慮すべきことを伝える。
- ②初期集中日本語研修の実践内容を紹介し、地域学習支援に向けて具体的な指導法を助言する。
- ③上記①②を通し、第三国定住難民の継続的日本語学習と地域参加を促す日本語学習支援者を育成する。

2. 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
2011年 12月27日	RHQ支援 センター	川出薫平 森永兼一 内藤真知子 新野佳子	・研修の目的確認 ・研修の概略説明 ・RHQ支援センター施設 見学	これまでの難民教育、日本語教育ならびに第三国定住難民との関わりや問題提起などを含めた自己紹介を行なった後、本研修の目的を確認し概略説明を行った。第三国定住難民第二陣の日

		小瀧雅子 安達幸子	<ul style="list-style-type: none"> ・第三国定住難民第二陣の日本語授業見学 ・RHQ支援センターでの教育について概要説明 ・研修に使用する教材選定について 	本語授業を見学と、RHQ支援センターでの教育について概要説明を行い、難民教育について理解を深め、指導者研修における指導内容ならびに使用教材について、各運営委員の経験と知見に基づく意見交換を行った。RHQでの集中研修を踏まえ、難民の特性・レベル等に合わせた日本語指導の必要性を確認した。また研修講座にむけた準備について話し合った。(カレン語・日本語会話帳生活用語集などの資料配布)
2012年 3月23日	公益社団 法人国際 日本語普 及協会	川出薫平 森永兼一 内藤真知子 新野佳子 小瀧雅子 安達幸子	<ul style="list-style-type: none"> ・研修内容及び研修結果報告 ・研修の成果及び問題点等 ・アンケート結果について ・今後の課題について ・今後の支援について 	鈴鹿で行った3回の指導者研修の内容について、また3回の研修を行うにつれての受講者の変化、研修に求められたものについて報告、並びに質疑応答を行った。受講者のアンケート結果分析と合わせて、研修の総括を行った。定住後の日本語学習支援指導者研修のあり方、及び定住後の日本語支援、第三国定住難民のための支援者が使いやすい教材に関して意見交換・提言を行った。

3. 養成講座の内容について

- (1) 講座名 第三国定住難民に対する定住後の日本語学習支援指導者研修
- (2) 開催場所 第1回 牧野コミュニティセンター
第2回 鈴鹿市市役所会議室
第3回 鈴鹿市市役所会議室 鈴鹿市国際交流協会
- (3) 学習目標
 - ・第3国定住難民にとって必須な日本語支援を地域の支援者が効果的かつ継続的に行えるようサポートする。
 - ・初期の集中日本語研修から地域における継続的な日本語学習支援への橋渡しとなる専門家による指導者研修を行うことによって、より効果的な日本語支援システムを構築する。
- (4) 使用した教材・リソース
 - 生活日本語教材 (RHQ支援センターUNIT学習項目一覧表、RHQ支援センター講師作成オリジナル教材)
 - プロソディ教材 (詩・歌など)
 - ITを使った教材作成のための資料 (日本語教材作成に便利なネット紹介)

- (5) 受講者の募集方法
 鈴鹿国際交流協会の協力を得て、 鈴鹿市における第三国定住難民支援関係者を募集した。
- (6) 受講者の総数 第1回ならびに第2回4人 第3回3人
 (出身・国籍別内訳 4人全員日本)
- (7) 開催時間数 (回数) 20 時間 (全 3 回)
- (8) 参加対象者の要件
 第三国定住難民の定住後の日本語学習支援を担当し、将来的に第三国定住難民を支援するボランティアの指導者となることが期待される者。ならびに第三国定住難民の日本語支援体制を作っていくうえでキーパーソンとなる人。

(9) 講座内容

回	開催日時	時間数	受講者数	講座名／学習内容	講師
①	1月9日 9:00～12:30 13:00～16:30	7時間	4人	研修オリエンテーション 難民への日本語教育の歴史と現在(概略) RHQ 支援センターでの日本語教育の内容 (教育目標・教育方針・教授法) RHQ センターでの集中研修について(学習者それぞれの日本語習得状況・教材紹介)	公益社団法人国際日本語普及協会専務理事 内藤真知子 国際日本語普及協会研修開発部副部長 新野佳子
②	1月30日 9:00～12:30 13:00～16:30	7時間	4人	日本語学習状況・授業内容報告(文字クラス・会話クラス) 問題点及びアドバイスについて クラス活動のヒント 教材作成ワークショップ PC を使った教材作成のノウハウ(IT技術の講習) 日本語教材をつくるためのネット利用について資料提供 教材作成	同上

③	2月20日 9:00~12:00 13:00~16:00	6時間	3人	日本語学習状況・授業内容報告(文字クラス・会話クラス) 学習者の変化について意見交換 今後の支援活動に向けた話し合い 第3国定住難民が学ぶ他地域の教室についての問題点及び提言 会話を引き出す素材について 教材作成ワークショップ 教材作成	同上
---	------------------------------------	-----	----	--	----

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

1. 全体の評価

今回の研修に対して、3名全員が「役に立った」と回答した。どのような内容が役に立ったかについては「日本語指導能力の向上」をあげた。内訳は複数回答で、文字指導の向上(1名)、教材作成能力向上(2名)、授業のアイデア・アクティビティなどのヒント(3名)、また、その他として「パソコンで作成する教材の扱いその具体的な作り方」であった。

2. 今後の学習支援体制に対する意見

- ・このまま続けることができたらと思います。
- ・実生活に役立つ日本語力を更に高めるように続けることが必要。
- ・東京での学習者の研修が終わってすぐ引きつぎができたらよかった。
- ・日本語学習が始まる前に全ての講座を完了させて欲しかった。
- ・講座前の学習者の情報があまりに少なく、授業を開始する前に不安があった。

3. この研修の改善に向けての意見・感想、要望など

- ・教材作成のヒントはとても役に立ちました。今後地域でもできたらと思います。
- ・できれば講座が始まる前に完了して欲しかった。
- ・各種教材はとても参考になり、すぐに使わせていただいたものもある。
- ・日本各地で行われている日本語教室では積み上げ式のところがほとんどだと思いますので、RHQで行われているような、学習者の生活から引き出す講座にとまどわれれると思います。なので、開講前の研修だけでなく、講座中に今回の研修のような情報交換の時間を設定されるとよいと思いました。

4. 第三国定住難民の継続的な日本語学習支援についての意見

- ・このまま続けることができたらと思います。ボランティアでは難しいこともあると思うので、地域で協力して進めていけたらいいのですが…、どうでしょうか。
- ・キャンプ出身の人々については、生活支援から十分な援助が必要と思われる。
- ・長く続けていくには財政的な支援が不可欠です。

② 実施主体からの研修内容結果評価

地域に定住を始めて日の浅い第三国定住難民に対して日本語学習支援をする場合、地域の支援者が難民の背景、日本語習得上の困難点や留意点を知っているか否かは彼らの学習支援が成功するか否かの鍵を握ると思われる。今回はそれを伝えることを目標の一つとしたが、支援指導者が実際の教室を始める日が翌日と迫っていたため、第1回目の研修に関する限り、支援指導者のこの点に対する興味関心は高くなく、十分に時間をとって説明ができなかったことが残念であった。

前述の点が不十分なまま、RHQにおける初期集中日本語研修の実践内容にはいったため、なかなかその指導意図、指導方法が理解されず、研修初回前半は苦慮した。しかし、RHQ教師によるオリジナル教材を見せたところから、支援者側にもいわゆる既定の教科書を使わず、難民の生活や関心に即したテーマで指導するというこれまで初期指導で行ってきた方法へのイメージが湧き、その教材作成のノウハウを知りたいとの強い希望が出た。

そこで、2回目では具体的な教材作成のワークショップを行い、この過程で報告者たちが難民への指導上、心がけてきたことを伝えた。また、難民の言葉を引き出すアクティビティの具体例、詩を使った授業、絵本や広告などを教材として活用する方法など、様々な実践例をワークショップ的に行ったことも指導支援者には新鮮に映ったようである。これらが効を奏し、指導支援者は熱心に研修に取り組み、研修で学んだことを実際に難民への日本語教室で実践し、成功体験を得る過程で当方の初回の説明を理解していった。

実際、研修の回を重ねる毎に、指導支援者の手作り教材の質は劇的に向上し、授業実践報告からも、当方が逆に学ぶような工夫が見られるようになった。それと同時に支援者が難民のありのままを受入れ、彼らに寄り添いながら日本語学習支援をしている様子を感じ取られた。最終的には、難民には今後も継続した日本語支援が必要で、これからは新しい地域支援者を巻き込んで日本語学習支援が地元で継続されるようにしたいとの所感を得ることができたことは、報告者としても大変喜ばしいことであった。RHQでの初期学習支援と地域における継続学習支援の間を橋渡しする意味の今回の研修の目的は達成されたと感じる。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

- ・ 学習者のレベルと日本語能力の伸びにあわせ、しかも個々の学習者毎にオリジナル教材を作成することは、地域のボランティア日本語支援者にとっては大変な負担になる。地域のボランティア日本語支援者が応用して作りしやすいワークシートなど、作成する負担の少ない教材を当協会が作成して地域に提供していく。
- ・ 地域の日本語支援者向けの教材作成ワークショップを行う。
- ・ 生活の中の学習素材の発見と活用のアイデアを地域支援者に向けて提供していく。
- ・ 文法項目をどのように押えていくかについては研修では触れられなかった。時間的に余裕がある講座を企画し、生活に必要な日本語を学習者の体験・経験に即し、学習者の日本語力の伸びに合わせて指導しながら、どのように文法項目を押えていくか、その具体的な教え方についての研修を行う。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

(財)鈴鹿市国際交流協会、鈴鹿市生活安全部市民対話課 外国人交流室との連携を確認しあった。今後の難民支援、地域外国人支援に関して、情報交換をし、AJALTとしてできることは何でも協力していく所存であることを伝えた。

また、今回直接指導した、指導支援者ともメールなどを通して情報交換をし、連携のネットワークを持ち続けることを確認した。

② 研修後の人材活用

今回の研修を受講した指導支援者のうちの一人は引き続き第三国定住難民の学習支援を継続するとのことである。そしてその先は地元の支援者を増やし、その人達を巻き込んでの支援の輪をひろげていくとのことであった。

また、受講者の一人でもあった鈴鹿国際交流協会職員は、今回 文字通り、関係者（難民本人、AJALT講師、支援者、事業者、地元町会、市職員等）を繋ぎ、今回の指導支援者研修、指導支援者による日本語教室を成功裡に導く教室コーディネータとして活躍された。このような方が中心になって、難民がやがて彼らのためだけの日本語教室から、さらに鈴鹿地域のさまざまな外国人が参加する日本語教室、さらには地域社会へと地域参加の世界を広げていければよいと思う。

③ 人を繋ぐ役目としての成果

今回、研修担当者はRHQにおける初期集中研修担当講師として、鈴鹿市の指導支援者へ難民への日本語教育をつなぐ役目を負って鈴鹿入りした。結果としてRHQ関係者、鈴鹿関係者双方の立場を理解する立場に立った。第三国定住難民を支援す

る上で極めて重要な人的ネットワーク形勢に、このことは一定の成果を果たしたのではないか。

③その他

現状では職場において難民たちが互いに話をする機会は多くないようだ。日本語教室に来て、互いに話をする機会をもつことができたことは、教室が彼らにとって職場とは違った息抜きの場所になり、難民相互の人間関係形成上、効果的だったようだという所感が支援指導者から出た。日本語教室が難民にとって、単なる日本語を学ぶ場以上の意味をもつ場となる可能性を示すものといえる。

(12) 今後の課題

① 定住後の日本語学習について

第三国定住難民の場合、キャンプから日本への生活スタイルの激変、彼らの学習歴などを鑑み、6箇月の初期集中研修だけでは日本の生活に自立して対応できる日本語能力を獲得するには不十分であり、定住先での継続した日本語学習が不可欠であるということは、今回の研修後の運営委員会および鈴鹿市主催の日本語講座関係者が一様に口にしたことである。

今回実施時期が遅かったため、初期集中研修と今回のつなぎの研修の間が約9ヶ月空いてしまい、第三国難民の日本語力、特に話す力が落ちてしまったことが指摘された。難民が定住先に落ち着いた段階で、なるべく早い時期に支援指導者研修を行い、日本語学習が継続できるように計画的に研修プログラムを組むことが重要である。

② 支援指導者研修の時期について

初期集中研修から地域での継続学習へとつなぐ、今回のようなつなぎの研修の意味は大きい。今回は支援指導者研修が遅すぎたため、難民教育の歴史や難民の背景などを落ち着いて学習することができなかった。第三国定住難民の日本語学習が始まる前に、難民の背景やキャンプの生活、RHQ 支援センターでの集中研修について学ぶことは重要である。

第三国定住難民の日本語学習が始まってから、実際の教え方や教材作成のノウハウを学ぶことも欠かせない。(難民に対する日本語教育は一般の外国人に対する日本語教育と性格が異なる面があるため、実際に難民に接し、日本語を教えていく中で研修を行ったほうが、理解が進むという側面があるため、日本語学習を行っている途中での研修も効果的である。)

なお、今回の鈴鹿市の場合、子どもへの支援は鈴鹿市教育委員会が中心になって充実して行われている様子で、対象から子ども支援者を外した。定住先の

地域の実情に合わせて子どもへの支援指導者への研修なども必要となるだろう。

- ② 今回は鈴鹿市国際交流協会による難民への日本語教室と、当協会による支援指導者研修とが併行して実施された。この過程で研修担当者は、難民に関する多くの関係者のそれぞれの視点から難民の定住支援について考える機会を得た。多くの場合、どの関係者も不十分な情報の中で模索しながら目前の難民への支援に動き、その中から徐々に連携のネットワークを構築し、支援体制を整えていく様子は目を見張るものがあった。

パイロットケース初年度であるから、いろいろな困難なことも多々ある。それをどのように乗り越えていったかは、他の受け入れ地域へのモデルになる。

第三国定住難民第一陣の定住先である鈴鹿市が今後、成功の「鈴鹿モデル」となっていくためには、今回の鈴鹿地域でのいろいろな人が関わっての取り組みを、鈴鹿のケースとして公開していくと良いのではないか。

- ③ コミュニティを作るには3家族だけというのは少ないため、今後の第三国定住難民の方たちが鈴鹿に定住してくれると良いという地元の願いを聞いた。今後、生じてくることが予想される継承語の問題を解決するには、ある程度のカレンのコミュニティができることが望ましいが、今後、第三国定住難民が鈴鹿に定住する可能性はあるのか、どのようにしたら、それが実現しやすくなるのかが課題である。
- ④ 第三国定住難民は現状では彼らに特化した日本語支援を受けているが、いずれ、地域在住の他の外国人と一緒に地域の日本語教室に入って世界をより広げることが望ましい。そのように彼らの学習の場が発展的に広がっていくためには地域の日本語教室に円滑に通えるよう、地域日本語教室への財政的支援が必要となる。

以上